

## 気候変化に関する北京国際シンポジウムの印象\*

吉野正敏・他\*\*

1990年8月9～12日、北京の図書館を会場として、外国人約40名、中国人約100名が参加した国際シンポジウムが開催された。組織委員会の委員長は葉篤正教授、副委員長は陶詩言教授、施雅風教授であった。組織委員は21名で、その中に日本人は、浅井富雄、山形俊男、吉野正敏の3名が加わっていた。参加した外国人のうち最多はアメリカ合衆国の18名、次いで日本の13名、3番目はソ連の6名、他はそれぞれ1名ずつで、はからずもこの数は現在の中国における気象学の国際的連繋の綱の太さに比例しているかのようであった。

9日午前、筆者は“竺可桢 生誕100年記念のシンポジウム”の開会に際して「竺可桢と世界の気候学」の関わりを述べた。彼がどうしてアメリカに留学し、ハーバード大学で気候学を学んだかを述べ、そして、そのDeC Ward(当時アメリカで唯一の気候学の教授)がJ.v. Hannの気候学をアメリカに紹介した人であることを指摘した。つまりは、オーストリア(ドイツ)の気候学がアメリカを経由して中国に輸入され、今日の基礎をなしたと思われる。次いで、施雅風教授は、中国における気候変化研究を、竺可桢先生がどの様に展開したかを述べた。

各セッションの様子や印象は、日本からの参加者がそれぞれ書いている通りである。前回のシンポジウムと比較して変わったのは、日本からは、大学院クラスや助手クラスの若い人たちの参加があったこと。会場がいくつかに分かれて同時進行した(これは、興味のある発表が重なって聞くことができない不満は残るが、多数の発表をこなすには止むを得ないであろう)こと。シンポジウムでのテーマが広がってきたこと——これは、中国の研究者の関心が気象学・気候学の広い分野に広がり、そして成果が出始めたことを意味しよう。また、中国の中

堅層の実力がつき、前回にも増して国際的感覚が培われてきたことである。次回が楽しみである。

### 印象記

馬谷 紳一郎(九大応力研)

8月9日から12日にかけて開催された標記のシンポジウムに日本学術振興会の日中共同プログラムの一環として参加する機会を得た。アジア大会に向けて着々と準備の進む北京の街は、高層ビルの林立する近代的大都市であった。シンポジウムは休日をはさんで実質3日間、午前8時(夏時間を採用しているために午前7時に相当する)から午後6時近くまで多数の講演が行われたが、時に中国の研究者による発表の多さには気候研究に対する中国の強い熱意が感じられた。

発表はA、B、C、Dの4つのセッションに分けられ、それぞれ観測と資料解析、数値モデル等による物理的・力学的研究、砂漠化等の乾燥気候に関する問題、そして気候の人間活動に対する影響等の発表が行われた。私は、A、Bセッションを中心に出席したが、特にAセッションで数多く発表された気候資料の解析には興味深いものがあった。数千年を遡る発表もあり、広大な中国には未だ利用されないままの貴重な資料がまだ数多く残されていることが想像され、今後更に密接に協力し合う必要性が感じられた。Bセッションでは日本を含め世界各国の大気・海洋モデルとともに、中国大気物理研究所の大気モデルに関する発表もあった。ただ残念なのは、セッションによっては、かなりの数がキャンセルとなり、講演時刻の変更も重なっていくつかの興味深い発表を聞くことが出来なかったことである。

### セッション A1に参加して

松本 淳(東大理)

本セッションでは、さまざまな時間スケールの急激な気候変化(Abrupt change)についての発表があった。いくつかの興味深かった発表を紹介すると、まず歴史時

\* Impressions of the Beijing International Symposium on Climatic Change, August 9-12, 1990.

\*\* Masatoshi Yoshino et al., 愛知大学文学部。

第1表 シンポジウムの構成.

## Plenary Session

Session A (A1~A5): Climate change and climatic variability on various time scales and abrupt change of climate

Conveners: J. Fletcher and Wu Xiangding

Session B (B1~B7): Physical and dynamic climatology and climate prediction

Conveners: J. Kutzbach and Zeng Qingcun

Session C (C1~C4): Drought and desertification

Conveners: A. Longhetto and Fu Congbin

Session D (D1~D3): Impact of climate on ecosystem, economics and society

Conveners: M. Yoshino and Wang Shaowu

Special Panel for International Cooperation

Chairperson: Ye Duzheng

代の気候変化に関し、Wu Xiangding と Yi Xungang は、黄河中心域の過去300年間の乾湿変化を解析し、18世紀中頃~末にかけてと1870~1900年代初頭が乾燥、19世紀初~1860年代と1920~50年代が湿潤であったこと、およびその乾湿期の変化が急激であったことを示した。

観測時代の変化については Jiang Aijun と Dong Xiaomin が、楊子江下流域の上海、南京における年平均気温が、1935年に急激な上昇、1954年に急激な下降をしたことを示した。また、Yan Zhongwei らは、北半球の夏の気候が1960年代に急激に変化したことを種々の気候要素について示した。Yi Yuhong と Wang Shaowu は、1980年代の全球的な昇温を急激な気候変化と解釈して解析した結果を示した。このセッションでは唯一、地質時代の気候変化を論じた J. Overpeck らは、最終氷期以降の昇温期において約12,500年前に急激な気候変化が広域的に起こったことを、主にアラビア海での深海底コアデータの解析結果をもとに示した。

このように、本セッションでは、気候の「急激な」変化が実に多様な時間・空間スケールで議論されていた。中国の気候学者はこのテーマに強い関心を持っているように感じられ、また一つのテーマをいろいろな地域、いろいろな時代について研究している中国の気候学の層の厚さには、驚かされた。

## 纪念竺可桢诞生100周年 国际气候变化研讨会在京举行

本报北京8月9日讯 记者钱三妹报道 北京国际气候研讨会今日在北京图书馆举行。在为期3天的会议中，各国学者和研究人员将从不同的角度和各种尺度就国际气候变化展开交流。这次会议的举行同时也是为了纪念我国近代气象事业的奠基人竺可桢诞生100周年。

为交流在气候变化方面取得的研究成果、促进深入研究，中国国家科学基金会、中国科学院及中国科协等单位共同举办了这次国际学术研讨会。与会者将就不同尺度的气候变化、气候变化机制、气候展望、气候对生态系统、经济及社会的影响等几个专题进行研讨。

在竺可桢先生毕生从事的科学研究中，成绩最为突出的就是气候变化。自20年代初起，他就开始了这项研究，这是他一生中持续最久的研究。

来自美、日、苏、法、英、意、印等国的近50名学者，中国及中国台北地区的近100名学者参加了本次研讨会。

第1图 シンポジウムの開催を報じる記事  
(科技日報1990年8月10日)。

なお本シンポジウム参加にあたり、日本気象学会国際学術研究会出席補助金ならびに東京大学理学部理学助成金からその費用の一部をご援助いただいたことに、深く感謝いたします。また初めて中国を訪れる機会を与えて下さった筑波大学の安成哲三先生・東京大学の浅井富雄先生にも誌上を借りてお礼申し上げます。

### 印象記

山形俊男(九大応力研)

日本学術振興会の日中共同プログラムの一環として、中国の気候学、気象学、地理学の創始者 Zhu Kezhen の生誕百年を記念する標記のシンポジウムに参加することができた。まず全体会議では筑波大学の吉野正敏教授による Zhu Kezhen の足跡の紹介が行われた。ついで四会場に分かれて、実質的には三日間、午前8時から午後6時近くまで約150余の講演発表があった。進行上の多少の不便こそあれ、中国の気候研究に対する並々ならぬ意気込みが感じられて圧倒されるものがあった。日本にあっては、平均的な質はともかくとして、これだけの講演数を揃えるのはまず不可能であろう。

さて、私は主として大気・海洋の数値モデルに関する発表の多い、セッションBを中心に出席した。特に大気物理研究所長の Zeng 博士と私とで司会した B1, B2, B3 のセッションはコロンビア大学の Cane 教授による ENSO のモデリング、九大の尹博士による日本海のモ

デリングの発表や、NCAR の Chervin 博士による高解像海洋モデル、Zeng 博士による大気物理研究所の AGCM、オーストラリア気象センターの Manton 博士によるオーストラリア AGCM の紹介等があり、かなり充実したセッションとなった。これは講演者の質の高さに加えて、中心的な役割を果たした Zeng 所長の国際性豊かな、気のおけない性格にもよっている。

コンピューター事情はとても良いとは言えないし、中堅として活躍すべき文革世代の欠落も痛い、良きリーダーのもとで中国の気候モデル研究の将来には曙光がみえる。本シンポジウムの翌週に開催された「気候変動の力学とモデリングに関する第3回夏の国際コロキウム」の全日程にもゲストとして参加したが、こうした印象はますます強まるばかりであった。

## 印象記

萩野谷 成徳 (気象研)

私が関係したセッションCを中心に発表内容の概略の紹介と国際集會に参加した感想を述べる。このセッションでは干ばつ気候と砂漠化に関連する発表が行われた。講演は9日の午後から12日の午前中まで中1日の休みをはさんで行われた。

講演のタイトルを見ると、砂漠化に関するレビューから始まって、中国やインドにおける干ばつや砂漠化の実態、韓国における干ばつ年と多雨年についての気候循環の特徴、干ばつの時の熱帯と亜熱帯領域の大気海洋の特徴、気候におよぼす植物活動と地面湿潤度の数値実験、干ばつと砂漠化研究に用いるための地表面のエネルギー交換モデルの感度解析と実験データによる検証、中国の歴史時代の干ばつについてなど。

これらのタイトルから分かるように干ばつや砂漠化を題材として様々な発表が行われた。その多くはルーチンのデータ解析であり、シミュレーションや観測に関する発表は少なかった。このセッションでの発表者はイタリア1題、韓国1題、日本3題そして残りはすべて中国であった。中国国内のこの方面の研究の実態は日本ではほとんど知ることができない。これは1つには中国の研究の文献がほとんど中国語で書かれているためもある。このような国際研究集會で初めて我々にも研究の実態がわかる。

このセッションは29題の発表予定に対して実際に発表を行ったのは20題そのうち1題は飛び入りであり、10題がキャンセルであった。そのほとんどが中国国内の遠方

からの参加者であった。国内旅費の工面が大変なのであるか？ それともシンポジウムに参加した形跡を残すことに意味があるのであろうか？ いずれにしても廊下を隔てた向い側の部屋で行われたAセッションに比べると静かな会場であった。

各会場はこじんまりしたところで一人当りの発表は質疑応答も含めて25分であったが、キャンセルがあったので30分以上話す人もいた。午前中と午後30分ずつコーヒーブレイクがあり発表に関すること、自分の行っている研究に関することなど活発な議論が行われた。筆者の発表に対して2、3質問が寄せられ聴衆の関心を引いていることが実感できた。

中国科学院の方々には滞在中、北京空港への出迎えから宿泊所の準備、毎日の会場への送迎等大変お世話になりました。本研究集會に参加するにあたり日本気象学会の国際学術集會への参加補助金を頂きました。ここに記して御礼申し上げます。

## Session C4 の印象

米谷 恒春 (防災科研)

「干ばつ気候と砂漠化」の最後のセッションとして、シンポジウム最終日の午前中が割り当てられたC4では、プログラムによれば7論文が発表される予定であった。ところが実際は4論文の発表が取り消された。これを補うように会場から飛び入りで一つ追加されたものの、結局、発表されたのは4論文であった。

内容としては、最近の約1年間(完新世)あるいは12から14世紀の干ばつを含む気候変化を論じたもの、砂漠化対策を論じたもの、及びチベット高原での熱収支観測研究の紹介であった。そして最も活発な質疑応答がなされたのは、テーマに即してと言うよりは他の事情から本セッションに割り付けられたに違いない気象研究所の萩野谷氏が紹介したチベット高原での熱収支観測研究の紹介についてであった。

以上のことは、たまたまセッションC4ではそうであったというだけで、干ばつ気候と砂漠化の研究が不活発であるということを示すものではない。干ばつ気候と砂漠化のテーマに2日間が割り当てられた。このことが根拠の一つであるが、特に中国では干ばつ及び砂漠化が重要な研究課題になっているようである。現在、砂漠化に関係する研究が日中の国際共同研究としていくつか推進されているが、その背景をわずかながら理解したように思う。

## 交流をさかんに

青木 孝 (気象庁)

中国の研究者は層が厚い。人口が多いのだから当然といってしまうえばそれまでだが、あらゆるテーマについて、必ず誰かが研究しているのではなからうか。その研究成果が日本や欧米の研究者に引用されることが少ないのは残念なことである。

例えば中国の研究者たちが使っている NOI というインデックスがある。30°N, 140°W の観測船とマニラの気圧差で Northern Oscillation Index (NOI) を定義すると、太平洋中央部やフィリピンの降水量と相関が高いことを、葉篤正が6年前のシンポジウムで指摘した。今回も大気物理研究所の金・陳や呉・陳は、NOI は SOI と同様にエルニーニョ現象の強さを決める重要なインデックスであることや、SOI よりも NOI のほうが PNA パターンとは関係が深いことなどを発表した。NOI は初めて聞いたという参加者が多かった様子で、質疑討論がさかんに行われた。

これまで中国語で書かれた論文が多かったが、最近では *Advances in Atmospheric Sciences* など英語による論文誌も出されている。隣の国でもあり、共通した研究テーマも多い。お互いの研究について、今まで以上に情報交換をする必要があることを改めて感じた。

## 印象記

尹 宋 煥 (九大応力研)

8月8日夕刻北京空港に降り立ち気候変動に関する北京国際シンポジウム実行委員会の差し回しの車で一直線に南下すること小一時間、宿泊先である北京林業大学の国際交流センターにたどり着く。20年ぐらいはたったであろうと思われるホテルには(後で聞いた話では築後一年だったのだが)実の所、亜然呆然としてしまった。なんとはなしに一流ホテルに泊まれるものと思ひこんでいた私は、その余りもの落差に驚いてしまったのである。

翌日から北京図書館でシンポジウムが始まり9日には竹松、山形、馬谷の各氏がそれぞれ回転流体実験、ミンダナオドーム、若狭湾への暖水の進入の話をし、私は東洋暖流の季節変動の話をした。一連の講演で一番印象に残ったのは Dr. R.M. Chervin の NCAR の eddy resolving ( $1/2^\circ \times 1/2^\circ$ ) GCM についての講演であった。Gulf Stream の離岸は現実より 200 km 程度北にシフトしているが黒潮の離岸は正常な緯度で行われてい

た。ゆっくりとしたしかも分かりやすい英語で非常に評判が良かったが、一年間の時間積分の結果を書き込むのに 150 巻の磁気テープが必要だそうでグローバル model への挑戦の意欲を喪失させるのに効果的な講演であった。Dr. X.-H. Zhang (中国科学院大気物理学研究所) は大気海洋結合モデルで使われている海洋 GCM についての講演の中で rigid lid 近似を外し自由表面を許すことの重要性を強調した。主な論点は自由表面を許すことによって有効位置エネルギーに重大な差異をもたらすとのことであった。後日、大気物理研究所を訪れて、非常に貧弱な計算設備にもめげずグローバルな大気海洋結合モデルを走らせようとする意気込みに感銘し、今度は逆に勇気づけられた。12日まで講演がつづき13日には待望の万里の長城への遠足があり 6,000 km 続くといわれる城壁の連なりは壮観であったが長城を建設するのにとられた想像を絶する人海戦術は研究の分野でもとられているようである。

## 気候システムにはカオスはいない?

竹松 正 樹 (九大応力研)

百家争鳴、北京の夏の3日間、気候変化に関して実に様々な研究成果が発表された。しかし、その著しい数の発表論文の中に、“気候システムは chaos か COSMOS か” という E.N. Lorenz (1963) 以来の基本的な問題をまともにも扱ったものがわずか2編とは、いささか意外であった。一つは Hameed & Currie によるもので、オレゴン州立大の二つの GCM (OSU 2, OSU 6) の大気圧変動のスペクトルをつぶさに調べたところ、主要な変動は離散的なスペクトル分布(それは弱非線形論で説明可能)を示し、モデルが chaos 的であるという徴候は見られなかったというものである。一方、Cane *et al.* は、ENSO の単純モデルを純化して得られる単一の回帰方程式において、準周期解が非周期解に遷移することを示し、元の単純モデルに chaos 的構造が内蔵されていることを示唆した。気候システムを chaos と考えているか否かは、研究内容からある程度判断できるものである。熱気と外国語で混濁した頭で判定したところ、気候システムは deterministic であるとする楽観派が圧倒的多数を占めているように見受けられた。

## 中国の歴史時代の気候変動研究から

田 上 善 夫 (都立大理)

中国で開かれたシンポジウムであるだけに、歴史時代

の気候変動についても、複数のセッションにわたって多くの講演があった。先の竺可楨による5000年来の気候変化の研究や、各大学や気象局による500年間の干ばつ・洪水の研究から、さらに多方面にテーマがひろがっていた。

関連する講演を通してみると、時代はより過去にさかのぼり、特定季節に限らずに通年にわたる研究が増えた。対象も干ばつ・洪水のほかにも、秋の雨、雹、雷、耕作限界等々の多様な現象が取り上げられ、地域的には特に中国北部での研究が充実していた。

復元された中国の気候変動からは、ヨーロッパの「小氷期」等との相違や、太平洋域のSOIや南極の氷の量の変動等との関係が明瞭になった。また気候の急激な変化について統計的に分析されて、その時期が設定されたことにより、気候変動史を理解しやすくなった。

代替資料として季節現象や気候災害が用いられるほか、北京、南京、蘇州、杭州に残された清朝の晴雨録により、18世紀初頭からの月ごとの気温と降水が推定された。しかし毎日の天気分布の復元には、関心がはらわれぬようであった。

さらに古気候の復元成果にもとづき、乾湿変動と社会に関する問題が、あらためて分析された。洪水、干ばつ、黄砂等々と内陸アジアの遊牧民の進出との相関関係、また明を滅ぼした李自成の農民反乱と中国北部で連続した干ばつの分布との対応関係が指摘された。

このシンポジウムでは、個別的な研究も多数聞かれたことが貴重であった。中国ではこの豊富な史料にもとづいて古気候の復元、成因、影響など多くのテーマが取り上げられていることが興味深かった。また中国の歴史時代の気候変動と、世界各地域の気候変動との関連がより明らかになりつつあるように思われた。

## 印象記

谷田貝 亜紀代 (筑波大地球科学)

私は中国についての気温・降水量変動の研究を特に注意して聞こうと思っていましたが、降水量変動や flood/drought の解析は section A と C とで並行して発表されたために、聞けないものが多く残念に思いました。結局私は様々な time-scale の気候変動がとりあげられた A の方に主に出席しました。その中で一番発表の多かった time-scale は最近100年間くらいのものでした。また A の title にありますが、abrupt change を扱ったものが意外に多く感じられました。このシンポジウムに参加

する前、中国ではまだコンピュータの事情で、多変量解析はまだそれほどなされていないと聞いていたのですが、EOF 解析を適用した研究発表が多かったのが驚きました。(しかし CEOF, 回転 EOF はまれでした)。

私がこのシンポジウムで感激したことがあります。それは、聴衆の方々は大部分が中国の方でしたが、未熟な私が片言の英語で、中国の最近の気温・降水量変動について発表するのを親切に注意深く聞いて下さったことです。しかも、後で多くの助言や討論をして下さいました。また、これからデータや文献のことで何かあったら連絡を下さい、これから交流しましょうとって下さる方々もあり、親しくなって市内観光に連れて行って下さった方もありました。さらに多くの同年代の若い研究者、院生の友達ができましたが、研究熱心で英会話が上手なので大変励まされました。

最後になりましたが、いろいろお世話になりました中国大気物理研究所の方々、日本から参加されたの方々、またこのような機会を与えて下さった安成哲三先生に深く感謝致します。

## 印象記

角野有香 (京大理)

私は現在大学院の M2 で、国際シンポジウムに参加するのは初めての経験でした。シンポジウムは大変なごやかな雰囲気で行われました。セッションも、まるで嵐のように言葉が飛び去っていくような状況を想像していたのですが、実際は何となくスローペースで(英語圏の人が相対的に少なかったからか、それともこれが普通なのかも知れませんが)タイムキープもしていないことが多かったし、前で発表者が困ったりすると会場全体から助け船が出たりしました。

私は20世紀後半の海面水温の長期変動について発表しました。私がトレンドとして解析した現象について、Yan Zhouwei 氏が、1960年前後の急激な変化に着目して、降水量や気温などについて解析したものもありました。彼以外にも何人も、私の結果に興味を持ってくれて、後で議論ができました。中国にも私と近い分野の研究者が多くいることを知り、驚くと同時に大変励みになりました。

休憩時間には、コップに葉っぱの入ったジャスミンティーを飲みながら、中国の若い研究者達と話をしました。あまりに多くの人に Ph. D. はアメリカで取るのか、と聞かれるので、正直言って私は驚きました。聞く

ところによると、中国の若い人々の多くは、外国でより進んだ研究をしたいと考えているそうです。日本の恵まれた研究環境の事など、改めて考えさせられました。

### おわりに

村上 勝人 (気象研)

暨今回中国側からも滞在についての援助を頂いて、8月の標記北京シンポジウムとそれに引き続く中国科学院大気物理研究所主催の「気候変動の力学とモデリングに関する第3回夏の国際コロキウム」に参加する機会を得た。私にとっては3度目になる北京の空港は、前回と同じく、やや照明の暗い、どことなくストイックな雰囲気な漂わせていた。ただ今回は「亜州運動会」(アジア競技大会)間近かと言うことで、歓迎のポスターやら幟やらが華やかに飾り付けられている。日本を出るときは各自バラバラに出発したのだが、北京空港に着いてみると4、5名の日本からの参加者と一緒であったことが分かった。科学院からの迎えの車で、宿舎となる北京林業大学の国際交流センターに案内される。ややアンティークな感じの宿舎である。尹さん程には驚かなかったが、場所が北京の郊外にあたり、周りが真っ暗で「ネオンの巷」に繰り出せないのが少々残念だった。まあ自分の発表の準備や、他の人のアブストラクトの予習をするのには良い場所である。

さてシンポジウムにおいては、私はセッションA「気候変化、種々の時間スケールによる気候変動および急激な気候変化」のうちの第2分科会(A2)の座長を仰せつかった。この分科会は午前8時から12時までの時間で当初8篇の発表が予定されていたが、キャンセルが2篇あり、1篇が他の分科会から移し替えられて結局7篇の発表となり、時間的にはゆったりしていた。発表の中味は、中国の発表者(5篇)が数十年から数百年のタイムスパンで見た降水量の変動を、米国からの発表者(1篇)がJonesのグローバル・データセットを用いた都市部の昇温傾向の評価を、日本からは松本淳氏がバン格拉デシュでのモンスーン降雨の長期変動と1987年の大洪水について議論した。中国はアジアモンスーンの降水域の主要な部分を占め、降水の異常は社会・経済活動に大きな影響をもたらすだけあって、この方面の調査研究は活発のようである。人口の多さにもよるものか、例えば1876年から78年にかけての異常少雨により1,300万人の

死者がでた(Zhang, Fang and Shi)などという数字には驚かされる。しかも彼らによれば、このような異常少雨は約150年に一度の割合で起こるといふ。当然インド・モンスーン変動との関連に着目した調査が行なわれており、Guoはインドの夏のモンスーン低気圧並びに西太平洋高気圧の変動と中国の降水量との相関関係を議論し、さらに最近の傾向のご他聞に洩れずENSOとの相関を指摘していた。ただ中国は国土が広いだけあって南部と北部といった地域による傾向の違いがかなりある(Li and Lin等)ようである。このような調査研究は主として中国全土に分布する多数の観測点の資料を用いて行なわれたものであったが、個別の地域の特徴の列挙だけでは、やや物足りない感否めない。例えば我が国の静止気象衛星「ひまわり」の資料などは地域間の関連を調査するうえで良い解析資料となるものと思われるが、対象期間が長いものが多かったせいもあってか、残念ながら今回の中国側の発表には衛星資料を利用したものはなかった。しかしながら今回の発表では、上記のENSOとの関連のように、次第にグローバルな循環との関わりに注目していこうとする傾向が感じられた。その意味で、松本氏の議論したような多層的な関連(バン格拉デシュ異常多雨～インドモンスーン異常少雨～エルニーニョ現象)は聴衆の興味をひいたようである。

ところで、今回のシンポジウムは、前にも書かれているように、北京の国立図書館を会場として行なわれた。この図書館は現代建築と中国風センスをミックスしたような広大なビルディングで、実に堂々としている。道路をはさんでその真向いには「オリンピックホテル」と銘打った超モダンなビルがそびえ、良い対照をなしていた。言うまでもないことだが、北京にはこの他にも見どころが沢山ある。今回は科学院の方々の心遣いで、レセプションやパンケットも景山公園や頤和園といった名所へ招待され、中国料理のみならず周囲の環境も満喫することができた。このようないわば公式行事以外にも、参加者仲間と連れだって見物した北海公園の夜のイルミネーション、王府井でのショッピングなど、交通・案内のお世話になったことが多い。この他にも万里の長城や、紅樓夢の情景を再現したという大観園などへのエクスカーションの手配など、いろいろと大変だったことと思う。若手の張智君博士を始めとする現場の担当者に感謝しつつ、この報告の取りまとめを終えたい。